

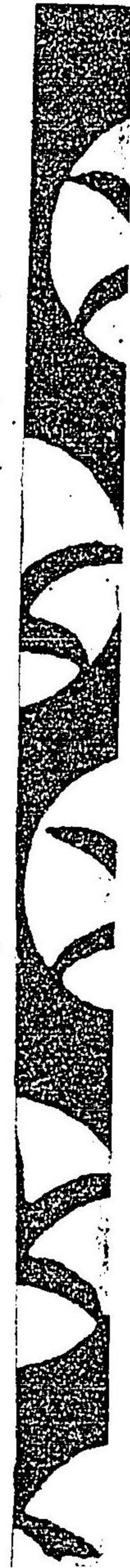
朝顔日記

特59

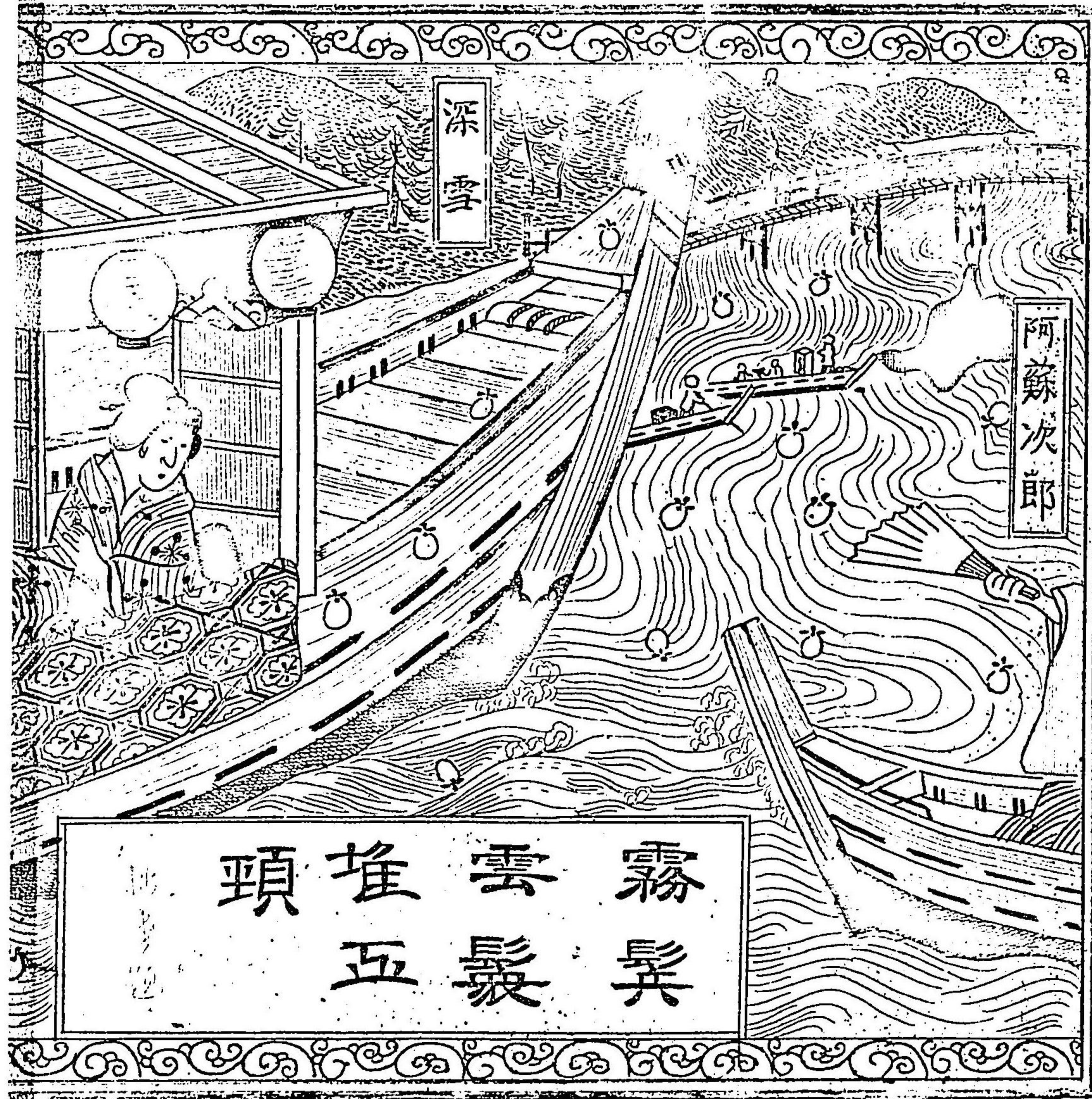
947



No 174621





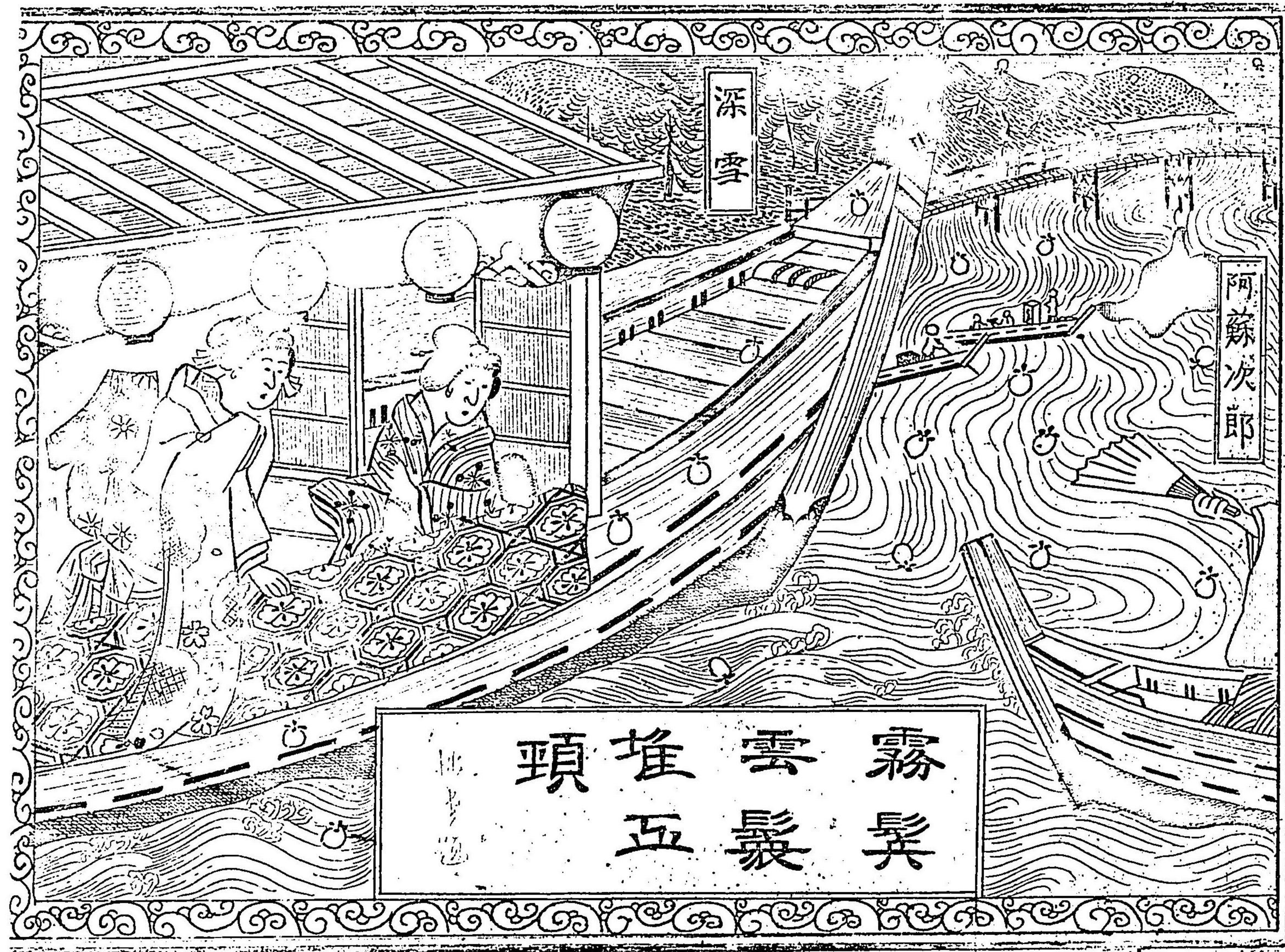


深雪

阿蘇次郎

霧鬢
雲堆
頭五







都嵐山の景



女無きてり殿の酒きしむつ外の
 方を吃と見たりおひ香茶の仰
 ありける侍座の面々顔見合せ
 何と仰らるる辨へ殿は御
 気色あしく侍のららぬ又香茶奉
 い一言宜きは最前より宮木阿曾
 三郎はまぐくけま人の顔うち守
 り居しう爰は到りぬ猶御座
 申者もこれが彼は礼し少し席を
 退き茶道風跡をよひあの翠簾
 御目障なりとしく捲上申さし
 下とさしやま心得其心得め
 さあゆいといも高々と巻上げ



花の痕相も辨
 為伊藤...
 落たれ
 詠ち
 今
 麻屋
 火
 横
 けれ
 老冷

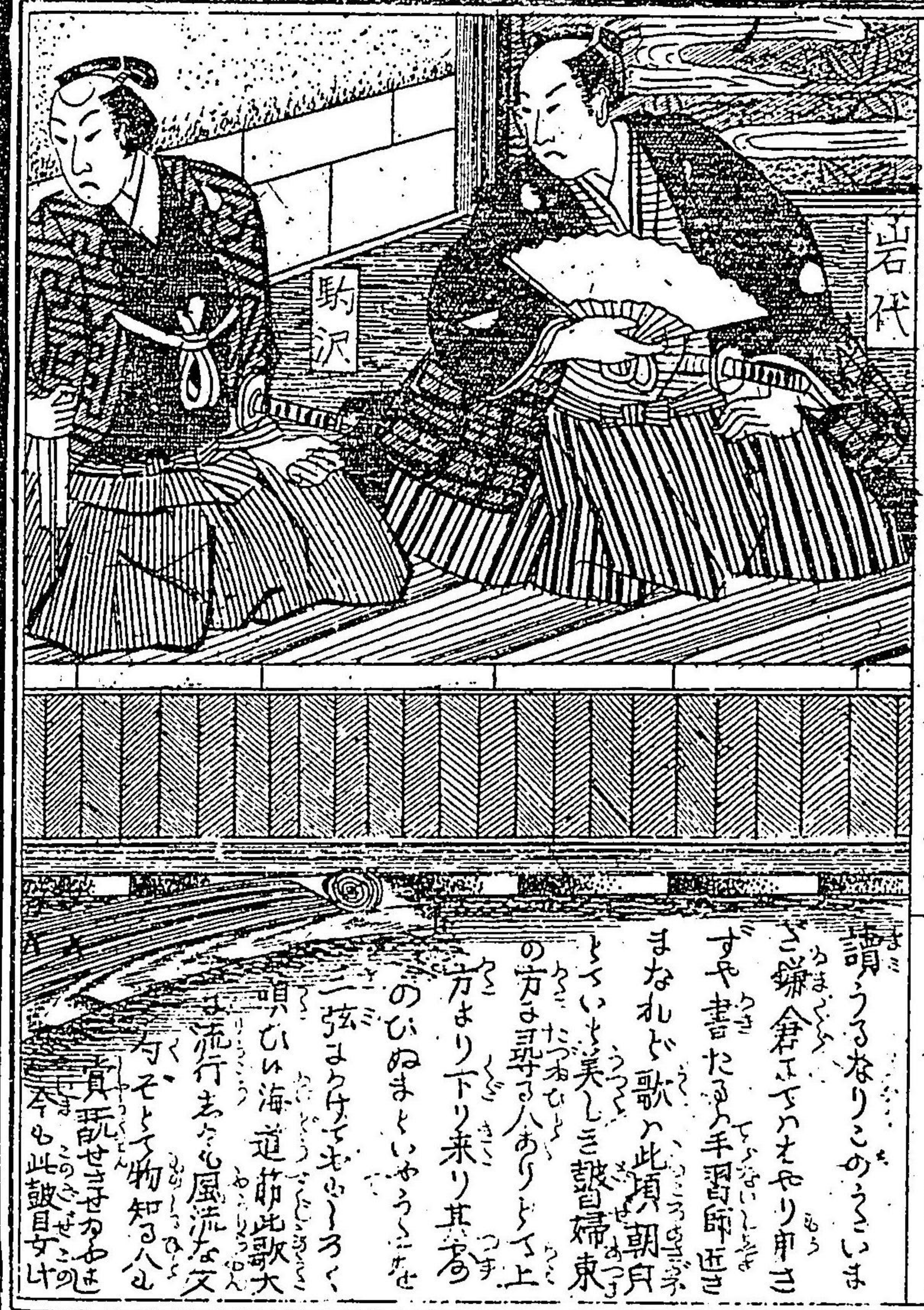




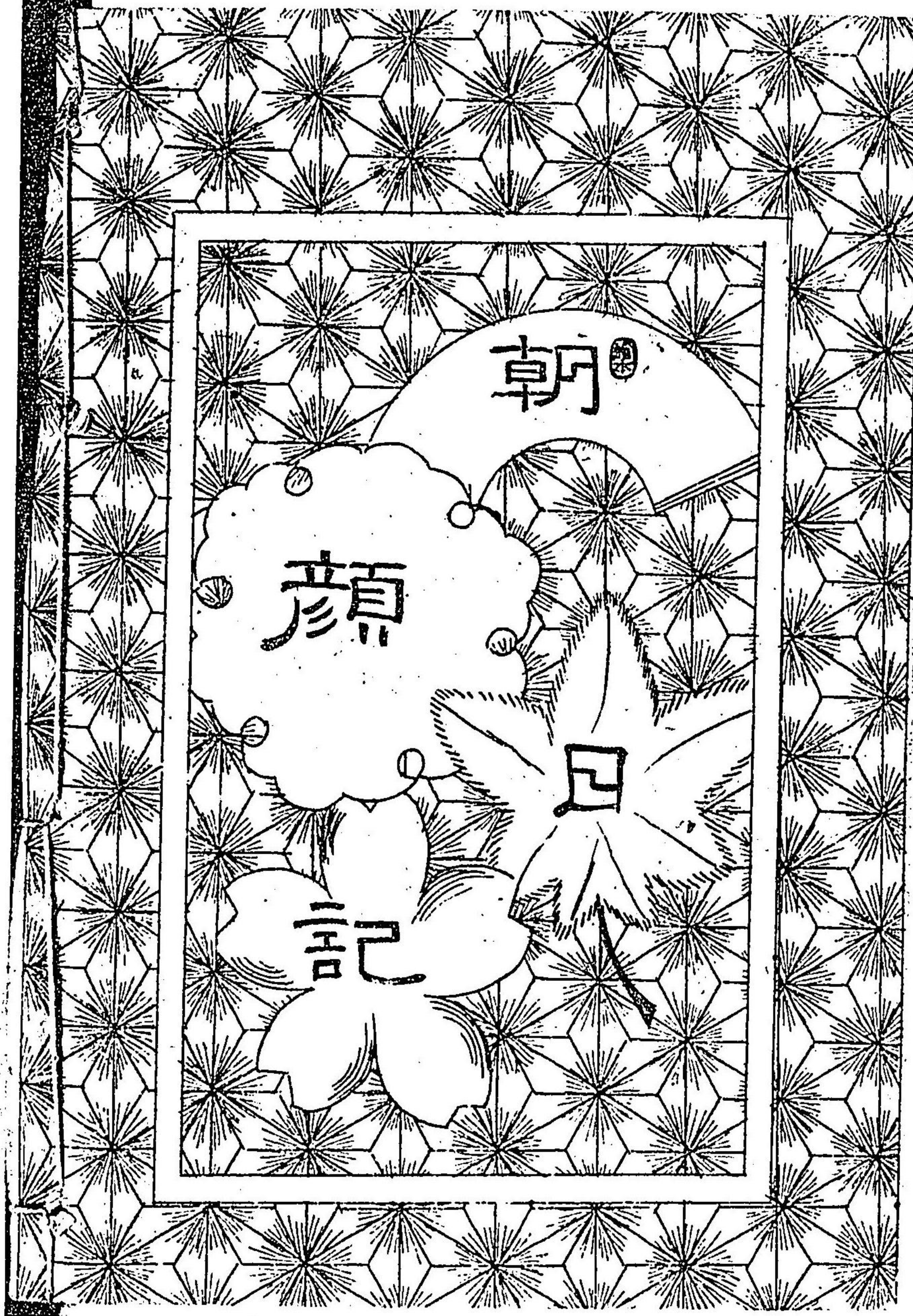
まじく
 来りてむ薄縁敷
 振り置せしぬ躰に礼したる奉動
 たけし自を一目見たりぬれなき深雪な
 り母の心ありと我上なきは

歌三六
 歌自女の

宿は逗留い
 りて居られ
 まもなの
 りい
 七駒沢



請ふるなりこのま
 と鎌倉よりおやり申さ
 ずや書きたる手習師に
 まなれど歌の此頃朝戸
 といふ美しき歌習婦東
 の方々母の心ありと上
 方より下り来り其ある
 のいぬまといふうたを
 一弦はかけせりう
 唱ひい海道節此歌大
 流行まも風流な文
 今も此歌目女け



朝

顏

日

記